

森のスズメ、島のカラス ～森と島で出会った身近な小鳥たちの話～

日時：平成29年11月25日（土） 13:30～15:30

話題提供者：姉崎 悟 氏（元あいち海上の森センター職員）

◎ プロフィール

姉崎 悟（あねざき さとる）



2009年4月～2014年3月まであいち海上の森センターに勤務。

離島での野鳥観察が好きで、最近は篠島など主に三河湾の島々で観察。

沖縄県大東諸島の戦前の鳥類相について文献調査をした経験あり。

◇ 森と島で思った4つの不思議

- ① スズメは森で何をしています？
- ② ヒヨドリの数は季節によって変わる？
- ③ コゲラは篠島にいつ棲み始めた？
- ④ 南大東島の迷いカラスはどこから来た？



① スズメは森で何をしています？ <海上の森>

◇スズメの暮らし

スズメは、家屋の隙き間に巣を作ることが多いので、森よりも住宅地で見かけることが多いですが、樹洞に巣を作ることもあります。ですので家屋がまだなかった大昔には、樹洞で子育てをするのが一般的だったかもしれません。巣材には枯れ草が多く使われます。スズメは主に草の種を食べますが、子育ての時期にはイモムシなどの虫も餌にします。巣材や餌を得るのに、田んぼはとても利用しやすい環境だと言えます。

◇海上の森のスズメ

あいち海上の森センター周辺には、森だけでなく住宅地や田んぼがあります。私は赴任してすぐに、センターの敷地内（センター・駐車場・遊歩施設）で見られる鳥の記録を始めましたが、最初の4月にはスズメの姿が見られず、とても不思議に思いました。



そこでスズメがセンター敷地内においてどの時期に見られるのか、2009年～2011年の3年間記録を続けたところ、5月～8月の間だけスズメが見られることが分かりました。この時期は子育てをする時期なので、もしかしたら森の中の樹洞に巣を作っているのではないかと思い、2012年にセンター職員や来館者の方々にも呼び掛けて、センター敷地内の5か所（駐車場・窯の歴史館・繭玉広場・物見の丘・南門）でスズメがどんな行動をしているのか、調査をしました。

2012年のスズメの行動



最初にスズメが見られたのは5月9日、センター駐車場・窯の歴史館・繭玉広場の3か所でした。その後、南門でも見られましたが、物見の丘ではこの年、一度も確認できませんでした。

物見の丘は、木々に囲まれた中にある展望台です。周囲があまり開けていないので、開けていない場所にはスズメはあまり寄りつかないのかもしれませんが。

5月中旬には、センター駐車場から北側の住宅地へ飛び立つスズメの姿が、また、南門と繭玉広場では南側の愛知工業大学のほうへ飛び立つスズメの姿が何度か見られました。森の中でも姿は見られるのですが、餌を探しては森の外へ飛び立つので、巣があるのは森の中ではなく、センターの北側にある住宅地と愛知工業大学の敷地内だと思われました。

2012年のスズメの行動



5月下旬になると、センター近くの森にスズメの親子が現れるようになりました。巣を離れ、虫が多くいる海上の森へ移動してきたのだと思われます。

梅雨に入るとスズメの観察記録は減りましたが、8月上旬になっ

て、センター周辺で子スズメの小群が見られるようになりました。その後、8月20日に20羽くらいの群れが見られたのを最後に、この年、スズメは見られなくなりました。スズメたちは活動場所を田んぼのほうへ移したのだと思われます。

◎気になった子スズメの行動（8月上旬）

①メジロ先生？

センター駐車場の一角にある植栽木でスズメの鳴き声をしたので観察していたところ、メジロが2羽飛び出して隣の木へ移り、そのあとを追いかけるように子スズメが3羽、隣の木へ移動しました。メジロは主に木の上で餌を採るので、飛んで行った子スズメたちはまるで、木の上での餌探しの先生を追いかけているように見えました。しかしメジロが次の木へ移動した時には追いかけなかったため、偶然そう見えただけかもしれません。

子スズメの行動① メジロ先生？



②メヒシバジャンプ

イネ科のメヒシバという草は高いものでは70 cm程度になり、子スズメたちはその種を食べるために一生懸命ジャンプを繰り返していました。しかし茎が柔らかく、ゆらゆら揺れるのをついばむのはとても大変そうに見えました。

これが親スズメになると、例えばエノコログサの穂に飛びつき、地面までしならせてから踏みつけ、そして種をついばむといった行動が見られたりします。私が見た子スズメたちはまだ不器用そうでしたが、こういった親の行動を見たりして、少しずつ餌の取り方を覚えていくのかもしれない。



以上の観察から、海上の森は、親スズメにとっては子育てに必要な餌を採る場、子スズメにとっては餌採りの勉強をして成長する場＝学校のようなものではないかと思われました。ただし今回行動を観察できたのは2012年5月～8月のわずか数か月だけで、得られた情報は少ないです。皆さんも海上の森を訪れたらスズメはいるか、いたらどんな行動をしているか、ぜひ観察してみてください。

② ヒヨドリの数は季節によって変わる？ <海上の森>

◇移動するヒヨドリ

ヒヨドリは、名前のとおり「ヒーヨ、ヒーヨ」と鳴く鳥で、木の実や花の蜜を好み、子育ての時期にはスズメのように虫も食べます。かつては、夏場は山に行かないと見られなかったそうですが、1970年頃から街中にも棲みつくようになったそうです。春と秋には渡りの群れが見られ、愛知県では秋に伊良湖岬から三重県神島へ渡っていく光景が有名です。海上の森でも、春と秋に小さな群れが通過するのを見ることができます。



◇数の変化の調査

森の中を歩いていると、いつもよりヒヨドリが騒がしく鳴いているように感じる時もあれば、逆に驚くほど静かに感じる時もあります。もしかしたら季節によって数が変わっているのかもしれないと思い、センター敷地内の森で調べてみることにしました。2011年～2013年の3年間、遊歩施設の鍵を開ける当番の日（月2～3回）に同じコース（遊歩施設入口→窯の歴史館→繭玉広場→物見の丘、約480m）を朝9時台に15分～20分かけて歩き、確認したヒヨドリの数を記録しました。



3年間の記録をもとに、各月の平均確認個体数のグラフを作成したところ、8月～2月にかけて高い山（秋冬の山）、2月～8月にかけて低い山（春夏の山）ができることが分かりました。ではなぜそんな山ができるのか、ほかの地域の情報も参考にして考えてみます。



◎秋冬の山

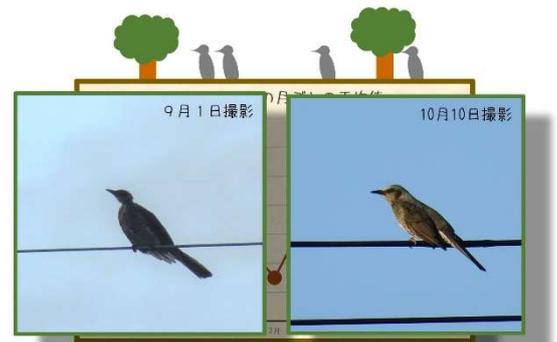
秋に海上の森へ渡ってきたヒヨドリの中には、木の実が豊富なので森に留まるものもいて、その結果、個体数が増加したものと考えられます。しかし食べ続ければやがて木の実が減りますので、ヒヨドリた

ちは森から少しずつ離れ、個体数が減少していったものと考えられます。冬は、ヒヨドリによる農業被害の件数が増加する時期でもあるそうなので、森から離れたヒヨドリは畑や果樹園にも立ち寄りなどして餌を確保し、冬を越しているのではないかと思います。

◎春夏の山

春になると、森の中には虫がたくさん増えます。ヒヨドリは子育ての時期に虫を多く捕えるようになるので、森を離れていたヒヨドリたちが虫を求めて再び森へ戻り、個体数が増加したのと考えられます。子育ての時期の縄張りは約 1.4 ha になるそうで、この時期は同じ範囲に留まるようになるため、4月～6月のグラフに大きな変化はなく、横ばいになったのだと思います。

巣立ちから1，2か月経つと縄張りは解消されるそうで、同じ範囲に留まらずに行動範囲が広がることにより、確認できる数が減ることがひとつ考えられます。しかしこの時期に数が減る理由は、もうひとつあるのではないかと思います。この時期は羽根が生え換わる時期（換羽期）で、飛べないわけではないのですが、羽根が不揃いになるので、多少不自由な部分があるように思います。この時期のヒヨドリはおとなしく、姿は見えても鳴き声があまり聞こえないということがしばしばあります。鳴かないと、森の中での調査では発見しづらくなるので、実際は減っていないが調査の上での確認個体数が減っていった、ということがあるように思います。



◇増えたヒヨドリ、減ったツグミ

3年間調査をして、海上の森ではこの「秋冬の山」と「春夏の山」が繰り返されていることが分かりました。そしてひとつ気付いたのが、2011年の「秋冬の山」から2012年3月にかけての部分が、他の年よりも少し高い山になっているということでした。不思議なことに同じ時期、西日本各地で冬鳥のツグミが減少しているという報告がありました。海上の森センターでもツグミは2月まで全く確認できず、3月になって大群が遊歩施設の森を北上していくのが見られました。ツグミが減少した原因



は不明です。

として当時言われていたのは、北日本以北で餌が豊富だったために西日本まで渡らなかったのではないかと、ということですが、3月に海上の森で大群が北上したことを考えると、西日本にも少なからず渡っていたのだらうと思われます。

こうした変化が起こる少し前、東日本大震災がありました。震災によって東北地方の地形や景色は大きく変わりましたので、もしかしたら、繁殖地のシベリアから戻ってきたツグミが東北地方で渡りのルートを見失い、いつもと違う地域へ渡ったために、ツグミが減少した地域が多くなったのかもしれない。同じように、ヒヨドリもルートを見失い、2011年～2012年の秋冬に海上の森へ多く集まってしまったのではないかと。十分な根拠はありませんが、そんなことも可能性のひとつとして考えられるのではないかと、思っています。

このようにヒヨドリは、餌を求めて森に集まり、餌がなくなると森を離れ、また、換羽の時期にはおとなしくなったりと、時期によっていろいろ変化しているらしいことが見えてきました。しかしまだどれも推察に過ぎません。実際どんな行動をしているのか、どこからどこへ移動しているのか、ヒヨドリについては分かっていないことがまだまだたくさんあるので、皆さんもぜひ注目していただけたらと思います。

③ コゲラはいつ篠島に棲み始めた？ <篠島>

◇海上の森のキツツキ

コゲラはキツツキの仲間です。「ギーッ」という鳴き声特徴的で、木を突いてドラミングと呼ばれる音も出します。ドラミングは縄張りを主張する意味があると考えられていて、コゲラは体が小さいため、ほかの種類よりも弱くて短い音になります。ヒヨドリと同じく以前は街中では見られない鳥でしたが、1980年代になって街中の緑地でも子育てをするようになりました。

海上の森ではコゲラだけでなく、アリスイ・アカゲラ・オオアカゲラ・アオゲラの計5種のキツツキが確認されています。この5種の中でコゲラが最小の体長15cmで、体長14cmのスズメとほぼ同じ大きさになります。一番大きいのはアオゲラで体長は29cmになり、体長28cmのヒヨドリとほぼ同じ大きさになります。

一年中海上の森で見られるのはコゲラとアオゲラです。アオゲラは生きている木に巣を作ることが多いですが、コゲラはアオゲラより体が小さく力が弱いので、堅い木は突けず、枯れた木や、生きた木の枯れ枝に巣を作ります。アリスイは主に秋に見られる渡り鳥で、オオアカゲラは海上の森では1回しか記録がないようです。アカゲラは、県内ではもう少し標高の高いところで子育てをするそうですが、海上の森では夏にも記録があるので、もしかしたら一年中暮らしている個体がいるのかもしれませんが。

◇篠島のコゲラ

篠島（愛知県知多郡南知多町）は、三河湾に浮かぶ面積0.94km²の島で、海上の森の約6分の1の大きさしかありません。北端から南端までは2.2kmで、これはあいち海上の森センターからモリコロパークまでの距離に相当します。主に住宅地が広がり、小規模な森が点在しています。

篠島で私がこれまでに確認したキツツキはアリスイ・コゲラ・アカゲラの3種で、このうち一年中見られるのはコゲラだけです。しかし1999年に篠島を毎月訪れた時は、コゲラを一度も観察できませんでした。その後、2006年4月までの渡島では全く確認できませんでしたが、間を空けて2012年9



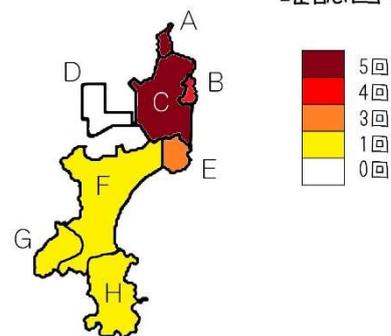
月に再び訪れたところ、コゲラを1羽確認することができました。でも1羽だけなので、棲みついているのか、迷い込んだだけなのかが分かりませんでした。そこで、2014年に毎月篠島を訪れ、コゲラがいるかどうかを調べてみました。

調査を行うにあたって、篠島をA～Hの8つの区域に分け、各区域にコゲラがいるかどうかを調べることにしました。地図上のグレーで示している部分（区域A,B,E,G,H）は森があるところ、区域CとDは埋立地になります。Cには住宅地とパークゴルフ場跡地があり、Dには人は住んでいなくて、漁港や海産物の加工工場があります。区域Fは丘陵地で、住宅地が広がり、東側には篠島最大の砂浜である前浜（ないば）海岸があります。



調査の結果、コゲラは区域Dを除く全区域で確認され、北へ行くほど確認月数が多いという結果になりました。篠島の南側には常緑広葉樹林（区域E,G,H）、北側にはクロマツ林（区域A,B）があります。クロマツ林は、2006年の時点ではトビが営巣するような太い木が並んでいましたが、その後松枯れが進み、クロマツの枯損木が急激に増えました。また、区域A

確認回数



にはオオシマザクラの大木があり、枯れ枝が多く見られました。こうした枯れ木、枯れ枝の増加によって、島の北側にはコゲラの巣作りしやすい環境が整ったものと考えられます。一方南側の森は、島民に聞いた話によるとかつてはクロマツ林だったそうですが、1959年の伊勢湾台風で倒木が増え、その後松枯れが進行し、マツが枯れ切った後に育ったのが、今広がる常緑広葉樹林なのだそうです。南側は細い木が多く、枯損木や枯れ枝はあまり見られませんので、コゲラが子育てをするにはまだ不向きな環境なのだと思います。

以上から、篠島にコゲラが定着したのは2007年から2014年の間だと推察されますが、ではコゲラは一体どこからやって来たのか、それを考えてみます。

日本野鳥の会愛知県支部は、愛知県からの委託を受けて県内各地で鳥の調査を行っており、その記録は愛知県環境部のホームページで見ることができます。そのデータをもとに、コゲラが一年中見られる地

域を調べてみたところ、1986年までは三河地方の山地だけだったようですが、1987年になって突然、名古屋市内の平和公園でも一年中見られるようになりました。その後分布が拡大し、2003年には知多半島の根元や篠島の南にある伊良湖岬でもコゲラが一年中見られるようになりました。この年、私は繁殖期に佐久島（愛知県西尾市。篠島の北東に浮かぶ離島）でもコゲラを確認しているので、篠島のすぐ北と南にコゲラが定着していたこととなります。しかし篠島にはまだ定着せず、2007年になって知多半島の鵜の山で繁殖期にも確認されるようになりました。篠島に定着したのが2007年～2014年の間ですので、知多半島から篠島に向かって、コゲラの分布が広がった可能性が考えられます。



私の感覚として、鳥が海を越えて島へ移り住むというのは大変な冒険ではないかと思うのですが、松枯れが進んだ途端に篠島に棲みついたところを見ると、海を越えるというよりは、少し離れた新しい森へ移り住むという感覚なのかもしれないと思いました。つまり鳥にとって島は、海上の森（カイショノモリ）ならぬ海上の森（カイジョウノモリ）と言えるのかもしれません。

④ 南大東島の迷いカラスはどこから来た？ <南大東島>

◇ハシボソガラスとハシブトガラス

本土で普通に見られるカラスにはハシボソガラスとハシブトガラスの2種類があり、一見似ていますが、体の大きさや嘴の大きさ、鳴く時の姿勢など、様々な違いがあります。外見以外では、ハシボソガラスは濁った声（ガーガー）、ハシブトガラスは澄んだ声（カーカー）という違いがありますが、ハシブトガラスの子ガラスは濁った声も出すので注意が必要です。

表：東京都環境局ホームページの表を改変
http://www.kankyo.metro.tokyo.jp/nature/animals_plants/crow/difference.html

比較項目	ハシボソガラス 	ハシブトガラス 
体の長さ（平均値）	50cm	57cm
嘴の大きさ（平均値）	小さくて細い（長さ5.3cm、幅1.9cm）	大きくて太い（長さ6.8cm、幅2.7cm）
頭部	段差がなく、なめらかに見える	段になっておでこがでているように見える
鳴声	濁った声（ガーガー） 	澄んだ声（カーカー） 
鳴く時の姿勢	体を振るわせる。腹部を膨らませ、頭と尾羽を下げてお辞儀をする格好	体を振るわせない。頭を前に突き出す。のどを膨らませる。
住まい	田園地帯、農耕地、河川など開けた場所	街の中、公園の森、海岸
営巣の場所	落葉広葉樹やマツなど明るい樹枝上、巣の位置は開放的でやや低い	クスなどのより高い常緑広葉樹の樹冠部の茂み

イラスト：水谷高英「野鳥フィールドノート」（文一総合出版）
 鳴き声：バードリサーチ鳴き声団鑑 http://www.bird-research.jp/1_shiryo/nakigoe.html

ハシボソガラスは農耕地など開けた場所を好みますが、ハシブトガラスは森の中や、高い建物が並ぶ街中にいることが多いです。巣を作る場所は、ハシボソガラスは落葉広葉樹やマツの木に多いようで、ハシブトガラスは常緑広葉樹が多いそうです。

篠島でこの2種が見られる区域を調べたところ、開けた場所が多いせいか、ハシボソガラスは島全体で多く見られましたが、ハシブトガラスは南側で多く見られる結果となりました。南側の常緑広葉樹林を好んでいるものと思われます。

全国の分布を見ると、ハシボソガラスが周年生息するのは本土とその周辺だけで、伊豆諸島・小笠原諸島・南西諸島・大東諸島では繁殖していません。ハシブトガラスは本土と伊豆諸島と南西諸島に周年生息しており、2種とも繁殖していないのは小笠原諸島と大東諸島になります。私が初めて大東諸島の南大東島（沖縄県島尻郡南大東村）を訪れた時、島の子供に「何しに来たの」と聞かれ、「鳥を見に来たんだ」と答えたら、「ほかの島に行ったほうがカラスとか見られるよ」と教えてくれました。南大東島の子供にとっては、カラスは身近な鳥ではないのだと気付かされました。

◇南大東島の“迷いカラス”

南大東島は、沖縄本島から東へ約 360km 離れた大東諸島の中にある島です。面積は 30.53 km²、海上の森の約 6 倍の大きさで、1900 年から人が住み始めました。環礁（ドーナツ状のサンゴ礁）が隆起してできた島で、内側が少し凹んだ形をしています。かつては原生林に覆われていましたが、人が住むようになって森林伐採が進み、今ではほとんどがサトウキビ畑になっています。



2000 年に発行された『日本鳥類目録 改訂第 6 版』には、ハシブトガラスは大東諸島において“Accidental visitor”（過去に迷い込んだことがある）と記されており、1974 年発行の『日本鳥類目録 改訂第 5 版』には、1924 年 12 月に南大東島で記録があったと記されています。しかし、1973 年の『大東島天然記念物特別調査報告』には、「既に絶滅したと考えられる」と記されていました。はたして迷い込んだのか、絶滅したのか、どちらが正しいのか調べたところ、正しいのは絶滅のほうだと分かりました。そして 1924 年 12 月の記録が、最後の 1 羽だったらしいことも分かりました。なぜ絶滅のほう正しいと分かったか。それは、島を訪れた人たちの日記や報告書の中に、カラスの生息が記されていたからです。

◇文献の中のカラス

調べた中で最も古い記述は『沖縄県下大東島巡視取調概略』（国標を建立した際の踏査報告書）の中にあつたもので、1885 年 8 月 29 日～31 日の報告の中に「禽ハ 烏 鶯 目白 山雀 鶇 等トス」と記されていました。このうち「鶯」（ウグイス）と「山雀」（ヤマガラ）は、のちに森林伐採の影響で大東



諸島から絶滅したのですが、ウグイスは最近になって新しい群れが迷い込み、再び棲みつき始めました。はるか遠くの離島でも、迷い込んだ鳥たちは新しい環境で生き抜こうとし、さらに次の世代へと繋いでいきます。カラスも、かつて迷い込んだおそらく数羽から命を繋ぎ、1924 年まで続いたのだと思われます。

次に古い記述は『米国遭難船救助顛末書』で、遭難したアメリカ人を 1891 年 10 月 3 日に救助した際の報告の中に、「鳥二羽ヲ認ム」と記されていました。続いて最初の開拓民・小島徹三の日記には、1900 年 1 月 23 日に「鴉は頭上来りカーカーとなき」とありました。鳴き声からハシブトガラスであったと確認できます。『大東島取調書』には 1903 年 6 月 16 日～20 日の報告の中に「鳥、鶯、鶇、鶇、目白、黒鳩等」とありました。このうち「鶇」（ツグミ）はイソヒヨドリ、「黒鳩」はリュウキュウカラスバトを指すと考えられますが、リュウキュウカラスバトはその後森林伐採等により、大東諸島だけでなく地球上から絶滅してしまいました。

続いて、研究者・黒田長禮の依頼により南西諸島で鳥の標本採集をしていた折居彪二郎の日記に、1922 年 10 月 26 日、北大東島に残る最後の 1 羽を撃ち損じたとの記述がありました。そして 1924 年 12 月 10 日に南大東島島民の國京國平がハシブトガラス 1 羽を採集し、その標本が黒田長禮のもとに送られて、『琉球孤島産鳥類の小採集物に就て』という論文にてその記録が報告されました。これが大東諸島でのハシブトガラスの最後の記録になります。絶滅した原因は、折居彪二郎と國京國平の話から、農作物や家畜への被害に伴う有害駆除、そしてネズミ駆除のためのリンの散布が影響したと考えられます。なお、最後の 1 羽の標本は、東京大空襲で焼失してしまったそうです。

その後、2002 年になって、過去（1978 年）に北大東島で採集された鳥の化石の中に、ハシブトガラスが含まれていたことが判明しました。この化石は更新世後期という時代の化石らしいので、ハシブトガラスは 1 万年以上前から大東諸島に生息していたことになります。

以上の私の文献調査の結果は、2012 年に『第二次世界大戦以前の北大東島と南大東島の鳥類』というタイトルで論文発表しました。これが影響したかどうかは分かりませんが、同じ年に発行された『日本鳥類目録 改訂第 7 版』で、大東諸島のハシブトガラスは“Former breeder”（かつては繁殖していた）と書き換えられました。

カラスのような身近な鳥でも、記録に気付かないと、いなかったことにされてしまうことがあります。ありふれた鳥でも記録を残し、それを多くの人と共有することが大切なのだと、文献調査を通して改めて思いました。

最後に

今回、身近な4種類の鳥の話をしました。

最初のスズメは、限られた時期にだけ森に現れたという話。

ヒヨドリは、一年中いるけれど数が増減していたという話。

コゲラは、いなかったのに棲みつくようになったという話。

ハシブトガラスは、かつていたのになくなったという話。

身近な鳥も、環境や地域が変わるといろいろ変化しているんだということをお話しさせていただきました。

今回取り上げた鳥は街中でも観察できるものばかりで、今回のような単純な記録の積み重ねでも、新しい発見があったり、あるいは環境の変化に気づいたりすることができます。見たこと・聞いたこと・思ったことを記録し、それを続けることの面白さ、大切さを今回の話から感じていただけたなら幸いです。

2012年のスズメの行動



本土で普通に見られるカラス

